

私の戦争体験

足柄上郡支部 澤村 裕幸（子）

戦没者 砂本 幹良

戦没地 ソロモン諸島

父の戦死は昭和十八年、私が四歳の時に白木の箱に紙切れ一枚が入った通知が母のところに届
けられ、母と公園のブランコに乗りながら二人で泣いた記憶がある。

以下、戦争の恐ろしさ・悲惨さの記憶にあるところを書いてみたい。

昭和十九年、母は女手一つで私を育てられないと思ったのか、私を戦死した父の実妹の澤村清
子（以下養母）の元に預けて行方不明となった。澤村家も養父が召集され養母が家業の雑貨店を
やりながら自分の子供二人と私を入れた三人の子供と暮らしていくことになった。

昭和二十年八月九日と記憶しているが、昼過ぎに空襲警報が鳴り、いきなり戦闘機の機銃掃射
を受けた。

当時住んでいた若松は、洞海湾を挟んで八幡製鉄所があり、そこへの空襲の通り道にあったた
め、雨あられの焼夷弾で爆撃され一帯の民家は全て火災となった。

初めは家の地下の防空壕に入っていたが危険なので町内組織で用意していた川の壁面をくり抜いて作っていたトンネル式の防空壕に避難し、川の水が火災で熱くなるな一晩を過ごした。翌朝明るくなつて出てみると、家の前の半地下式の防空壕は焼夷弾で潰され避難していた全員が死んだとのこと。

我が家も全焼で、終戦の日まで筑豊本線の線路脇で野宿していた。食料は町内の炊き出しと納屋に入れていた南瓜の焼けたものを食べた記憶がある。

終戦になつて養母は住むところがないので砂本の本家が疎開していた大分県の日田に行くことに決め、子供三人の手を引いて若松く久留米く日田と空襲でずたずたにされた鉄道を乗り継ぎ、不通区間は歩いて何日もかけて日田に辿り着き、そこで生活していたが、養母は疲労から寝込んでしまった。

鹿児島で暗号解読兵として召集されていた養父が復員してきて若松の地所に家を再建し一緒に生活していたが実母は敗戦の混乱で行方知れずとなり、私も澤村の家から地元の小学校に通学していたが、昭和二十三年になり実母は病死していたことが判明し、澤村家に養子縁組をして現在に至っている。

幼いときの体験であるが、戦争は国を破壊し家庭を目茶苦茶にしてしまう。
イラク、アフガンしかり苦しむのは国民であり、二度と戦争は御免である。